

連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部鹿毛敏夫教授の 「大友政親～書院造の二層楼閣建築～」が掲載

●大分合同新聞朝刊 2020年4月18日(土)

大友時代を
生きた人々

鹿毛 敏夫

大友政親



慈照寺銀閣。大友政親館の主殿も同じ書院造りの二層樓閣だった

書院造りの二層樓閣建築

大友政親は、西統迭立の慣例を破り、家督に就いた室町時代後半の武将・守護大名です。守護大名期の大友家は9代氏継と10代親世以降、双方から交互に家督繼承者を出す西統迭立の不安定期でした。そうした中、氏継系から出た15代親繁が西統の融和に成功し、まず寛正3年(1462)年に、19歳の嫡子政親に豊後国守護職を譲ります。そして文明8年(1476)年4月、7代にわたり100年続いた兩統迭立の慣例を破り、ついに政親が第16代家督に就きます。

また、「木碎之注文」という室町期大友家大工の木割史料(寸法などを記した技術書)には、「文明八年丙申八月十九日ニ御柱立、同御棟上十二月十四日」とあり、同年に政親が、自身の館の柱立と棟上、つまり主殿の建て替え工事を始めたことが分かります。さらに政親は室町幕府の後ろ

盾を得るため、將軍引退後も実権を握る足利義政に進物を贈りますが、注目されるのはその量です。「大友家文書録」の記録から將軍家と近親に贈った総量を計算すると、太刀11本、鷺眼6万1千疋。鷺眼とは、中央に穴が開いて鳥の目に似ていることから名付けられた輸入中国錢のことで、6万1千疋は錢61万枚に相当。この数値は、政親の家督繼承が、莫大な資産を費やしても祝うべき大友家の慶事だったことを示しています。

このように文明8年という年は、守護大名家大友氏にとって100年の不安定政権期を脱し、父から子へ家督の直系繼承を実現できたためたい年で、館の普請も「御一家御祝儀」の造営事業でした。注目したいのは、木碎之注文でこの館建設を「御屋形御主殿御一皆作」と記していることで、政親が新築した主殿が一層構造の建物だったと分

かります。

この記録は極めて興味深いことです。というのも、親繁・政親父子が莫大な祝儀進物を贈つて密接な関係を保った前將軍足利義政の手による二層構造建築物、慈照寺觀音殿いわゆる「銀閣」の建設時期と重なるのです。銀閣の上棟は長享3(1489)年で、政親の主殿上棟の13年後。しかも、政親の主殿は床が「板敷」で、「しやうし(障子)さい立」と記されており、まさに東山文化を象徴する書院造りの二層樓閣建築でした。「しやうし(障子)さい立」とは敷居の溝の西縁に「さい」(付桶端)と呼ぶ細木を造り付けて明障子をはじめ込んだ仕組みのことです。

15世紀後半の九州に、京都の銀閣同様の樓閣が有力守護大名によつて當まれていた事実は、室町後期西国(北陸)の文化と経済力の高さを物語っています。

(名古屋学院大学国際文化学部教授)